



TITLE:

[書評]Mogens Laerke, 'Leibniz  
lecteur de Spinoza', Honoré  
Champion, 2008.

AUTHOR(S):

枝村, 祥平

---

CITATION:

枝村, 祥平. [書評]Mogens Laerke, 'Leibniz lecteur de Spinoza', Honoré Champion, 2008..  
京都大学文学部哲学研究室紀要 2013, 16: 53-58

ISSUE DATE:

2013

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/192333>

RIGHT:

## 書評

Mogens Laerke,  
*Leibniz lecteur de Spinoza*,  
Honoré Champion, 2008.

枝村祥平

本書は、現在アバディーン大学の講師及びリヨン高等師範学校のマリー・キュリー研究フェローをつとめる著者が、ライプニッツ(1646-1716)がスピノザ(1632-1677)からどのような影響を受けたか、どの点を批判し乗り越えようとしたかを明らかにしようとした大著である。レルケはパリ第四大学（ソルボンヌ）にて大部の博士論文を提出し、それを増補改訂して本書を出版した。レルケはまた、ライス大学、リヨン高等師範学校、ニューヨーク大学、プリンストン大学、テルアビブ大学で客員研究員をし、シカゴ大学で客員教員をつとめ、現職に至っている。その間、現在哲学史研究で世界的に権威のある雑誌*British Journal of the History of Philosophy*及び*Journal of the History of Philosophy*からも論文を発表している。‘Spinoza’s Cosmological Argument in the *Ethics*’(2011)は*Journal of the History of Philosophy*の賞に輝き、レルケがライプニッツ学者としてのみならず、スピノザ研究者としても国際的に通用する実力をもっていることが伺える。

さて千頁を超える本書は、大部にすぎるとの印象をもたれることがあるものの、ライプニッツとスピノザの関係を論じた記念碑的な労作としての評価を確立しつつある。例えば*The Leibniz Review*の書評でマリア・アントニヤッツァは、レルケによるライプニッツとスピノザとの複雑な遭遇の批判的な考察の中に「ひっくり返されていない石」は残っていないとしているし、*Archives de Philosophie*の書評でも、ジャクリーヌ・ラグレは本書をスピノザがライプニッツを真剣に研究するならば読まざるを得ない本だとしている。正直に言うとなら私は本書を開いたとき、この本は冗長なのではないかという先入観を持っていた。が、実はそうではなかった。本書における論述のきめ細かさは、英米系の研究者によく見られるアナリティカルライティングのそれとは少し違うかもしれないが、ソルボンヌの名誉教授であるミシェル・フィションの論文にも見られるような、明晰で情報量が多い議論が続いており、間違いなく密度の濃い研究書である。また本書は、ライプニッツを主としスピノザを従とする形で、ライプニッツとの関係を明らかにする目的においてスピノザを論じる、というスタイルを取らず、スピノザを、形而上学、神学、政治哲学など多くの切り口から申し分なく論じており、後に挙げるアポステリオリな神の存在証明についての研究な

ど、スピノザ研究者をもうならせる内容を含んでいる。そして、ライプニッツの視点からスピノザを断罪することはなく、ライプニッツがスピノザを誤解していた点をいくつも挙げている。以下ではもう少し個別的に、本書の優れた点を追っていこう。

①踏まえられている哲学史上の文脈の豊富さ。本書で踏まえられている文脈としては当然ながらも、「17世紀哲学史」のそれが挙げられる。デカルトやホッブズについては専門の研究者にも参考となるであろう中身の濃い考察が含まれているし、マールブランシュ、アルノー、ベール、ファン・ヘルモント、ヘンリー・モア、ガッサンディ、オルデンプルグ、レジス、トーランドなどにも詳細な注意を払っている。また、ドイツ哲学史の文脈では、メンデルスゾーン、カント、ヤコービ、ヘルダー、シュレーゲル、シェリング、ヘーゲルらにおける、スピノザや汎神論についての議論が、踏まえられている(pp. 50-6, 925-7)。さらに、ドゥルーズ、セール、バリバールらにも言及し、現代フランス哲学の文脈においてライプニッツやスピノザのどの議論が効いているのかをそこで見て取ることができる。

②先行研究の消化。本書では膨大な先行研究への言及がある。概して、英語圏の研究者は英語文献に、フランスの研究者はフランス語文献に、ドイツの研究者ならドイツのものに議論が偏りがちであるが、本書にはそのような偏りは見られず、フランス語、ドイツ語のもののみならず、英語圏のライプニッツ研究及びスピノザ研究を広範に踏まえている。特に言及の多い研究者は、ロバート・アダムズ、イヴオン・ベラヴァル、ヴァンサン・カロ、ジョルジュ・フリードマン、マルシャル・ゲルー、ジョナサン・イスラエル、マーク・カルスタッド、クリスティア・マーサー、ピエール＝フランソワ・モロー、G.H.R.パーキンソン、アンドレ・ロビネなどである。

③詳細な形而上学の考察。第四章及び第五章では、実体、原因及び自己原因、様態、属性、神の存在証明、神の知性、人間精神、観念、可能性、現実存在といった17世紀哲学史におけるキータームが余さず論じられる。特に神についての形而上学的考察が充実している。独創的な点としては、スピノザにおける、我々がもつ観念からさかのぼってゆくアポステリオリな神の存在証明の紹介が挙げられるだろう(pp. 721-7, 733-8)。本書におけるこのアポステリオリな証明についての考察は、Laerke (2011)へと昇華された。他にも例えば、自己原因として神を捉える点に関して、スピノザとフランシスコ・スアレスとの対比がなされ(pp. 639-40 cf. Carraud, 2002)、スピノザの原因についての考え方を浮き彫りにしようとしている。さらに、スピノザとライプニッツにおける偶然性理解の違いと、ライプニッツにおける共可能性についての考察も興味深い。共可能性については、ドゥルーズの『襞』における理解と、ニコラス・レッシュャーやドナルド・ラザフォードの理解が対比されており(p. 831)、現代フランス哲学と英語圏のライプニッツ研究に精通したレルケならではの味

が出ている。以上のような考察を経てレルケは、一般的にライプニッツは形而上学の展開において論理を重視したのに対し、スピノザは原因論を重視している、という評価を下している(pp. 827-9, 846-7)。

④豊富な神学の議論。第二章では、ライプニッツが「自然主義者(Naturaliste)」及び「自由思想家(Libertin)」としてのスピノザに対抗しようとした、とされている。つまり、ライプニッツの目からみれば、スピノザは理性を強調するあまり神学そのものを否定している、というのである(スピノザは彼独自の「神」概念をもっていたわけであるが)。第二章では、スピノザとライプニッツの聖書に対するアプローチの違いが紹介される。ライプニッツはプロテスタントでありながら、聖書の解釈にあたり理性と歴史が重要と強調した。とはいえ、聖書の意味するところは必ず真であると確信していた点で、ライプニッツはルター派的だとされ、スピノザと区別される(pp. 307-11)。以上の議論にあたり、ルターについて立ち入った議論もなされている。

⑤豊富な政治哲学の議論。ライプニッツは「契約主義者(contractualiste)」としてのスピノザをも標的にしていた、とされる。第二章第三節では両者に影響を及ぼしたホッブズについての考察が豊富に展開される(pp. 186-93)。ライプニッツは自然状態においても、家族などの自然な社会が存在し、そこにおいて自然法が通用している、と論じている(cf. Brown 1995)。スピノザもまた、ホッブズのように自然状態と契約により成立した国家をもった状態とに断絶があるとは考えないが(p. 194)、自然法の理解ではライプニッツと著しく異なる。ただ両者とも、自己愛による複雑なシステムにおける自然法の確立ということを配慮した点で共通しているのである(p. 242)。

⑥スピノザとライプニッツの言語観の違いについての詳論。第四章第一～二節は、スピノザとライプニッツの言語観の違いと、それに伴いライプニッツがどうスピノザを批判したかについての独創的な考察を含んでいる。ライプニッツはスピノザを「革新者(novateur)」と位置づける(p. 121)。そして、それは否定的な意味合いを含んでいる。またしばしば、ライプニッツはスピノザの表現が「曖昧だ(obscur)」という。ライプニッツは1677年にスピノザを実質的な説明能力をもってると評価したが、1678年には評価を改めスピノザの表現を曖昧なものと断じる(p. 583)。幾何学的方法と語は、かえって哲学の内容を神秘化しわかりにくくする、とライプニッツは評価しているとされる。このように第四章では、スピノザとライプニッツの言語観の違いが彼らの哲学的著作の大きな違いとなって現れている様が論じられ、同様の内容がLaerke(2009)でも詳論されている。

⑦最後に、本書にはライプニッツのスピノザに対する態度の変遷と、ライプニッツの形而上学の発展史が詳しく記されている。レルケによれば、ライプニッツは1671年以前には、

師ヤコブ・トマジウスに従って、スピノザに否定的な評価を与えていた(pp. 991-9)。一方、1672-6年には、スピノザに強い関心を示して、あえて交流をもとうとした。そして、スピノザの影響を受けた『至高存在について(De Summa Rerum)』(以下DSR)と名付けられた一連の著作を残した。しかし1677-8年になると、スピノザの形而上学から距離を取るような、一連の議論を展開するようになる。そして1678-9年には、スピノザの遺稿を読み、『エチカ』について批判的注解を残す。1679年以降には、明確にスピノザから距離をとり、さまざまな論点において彼を一貫して批判する。

以上多くの優れた点をみてきたが、本書における初期ライプニッツの形而上学の解釈に限りささやかながら批評しておきたい。上記からわかるようにレルケは、1679年以降のライプニッツの議論がスピノザのものと明確に区別されることを認めながらも、ライプニッツが一時期スピノザから強い影響を受けたことを認める。従来多くの学者たちが、二人の重要な哲学者の関係に関心を払ってきた。例えばルートヴィッヒ・シュタインは、ゲルハルト版の一節を引き、ライプニッツが汎神論を提示していることを示唆し(Stein, 1890, p. 5; Kulstad, 1994, n. 9; G1 129 n.2)、西田もこのシュタインの古典的研究に言及している。一方フリードマンは『ライプニッツとスピノザ』第一版序文(1945年)でシュタインの解釈を独断的だとした(Friedman, 1962, p. 14)。

とはいえ、こうした先行研究には問題点があった。というのもシュタインやフリードマンの時代には初期ライプニッツの未編集テキストが多く、彼らはライプニッツの残したものをあまねく踏まえることができなかったからである。一方現在では、ライプニッツ研究の決定版ともなるべき、アカデミー版の刊行が進んでいる。そのことにより、ライプニッツが書き残したもののについて、より包括的な考察が可能となっているのである。

こうした背景を踏まえて、まずパーキンソンはフリードマンに同意して、DSRは必ずしも若い時期のライプニッツがスピノザ主義的形而上学を保持していたことを示すわけではないとした(Parkinson, 1978)。これに対しカルスタッドは、フリードマンよりもむしろシュタインに同意し、DSRの議論がライプニッツの後のものとは食い違い、スピノザの影響を色濃く示すことを論じた(Kulstad, 1994)。

レルケもカルスタッドに従い、DSRがスピノザの影響を受け神のみを実体とした形而上学を展開したテキストであると解釈する。この点については私も同意する(枝村 2014)。というのも、第一に、DSRにおいては神のみが実体であることを明確に示した箇所がいくつかあるからである。例えば、DSRに含まれる小論の一つ『最完全者は可能だということ(Quod Ens Perfectissimum Sit Possible)』には、「すべての諸事物は実体として(つまり根本的に)ではなく様態として区別されると容易に証明されうる」とある(A VI iii, 573)。第二に、DSR

は小論の寄せ集めであって、ライブニッツにとっての作業仮説を記したものとみられることもあるが、DSR以外の同時期のテキストにも、神のみが実体であることを示唆した箇所があるからである。例えばスピノザ『エチカ』についての覚書では、「神のみがすべてのものである、というのも神のうちにすべての他のものが現実存在するための要件が含まれているからである」(A VI iii, 385 1675年10月-1676年2月?)とされる。またスピノザのオルデンブルグ宛書簡についての覚書では、「すべては一つであり、すべては結果がその十分な原因(*causa sua plana*)のうちに含まれているように、そしてある主体の特質が同じ主体の本質のうちに含まれているように、神のうちにある」とされる(G1 129 n.2 1676年10月?)。

さて、カルスタッドとレルケは、DSRで諸事物が様態とみなされるとするだけでなく、諸事物がどのように唯一の実体である神から生まれるのかを考察し、スピノザとDSRにおけるライブニッツとの差異をも明らかにしようとしている。カルスタッドとレルケによればDSRは、特に諸事物が神からいかにして生ずるかについて、複数の違った説明を含んでいる(pp. 518-38; Kulstad, 1999, pp. 78-85)。カルスタッドが言う一つ目の説明は、様々な肯定的な単純属性同士の関係から、諸事物の差異が生じるというものである。つまり、肯定的な単純属性の集まりは一つしかないが、単純属性たちはさまざまな形で関係づけられることができるので、それにより多様な特質(*proprietas*)が生じる、というのである(A VI iii, 523)。二つ目は、肯定的な単純属性の集まりに加えて、単純属性の集まりを含んだ基体(*subjectum*)により、諸事物が生じるという理論である(A VI iii, 514, 523)。三つ目は、肯定的な単純属性ないし形相に加えて、質料により、諸事物が生じるという理論である(A VI iii, 518-9)。

さらにこれら三つのカルスタッドの説明に加えてレルケは、「もっぱら神の本質による説明(*L'explication uniquement par l'essence de Dieu*)」を紹介しているが(pp. 518-20; A VI iii, 518-9)、むしろこれは単純属性同士の関係による説明を導入するものとして捉えられている。つまり「もっぱら神の本質による説明」は、神の知性が、自らの本質であるさまざまな単純属性を違った視点からみることにより、これらをさまざまに関係付けて多様な特性を見出すということに帰着する、というのである。そうであれば、この説明は単純同士の関係による説明に帰着するように思われる。であれば、レルケは三つの説明のみを紹介するに留めておけばよかったのではないだろうか。

またレルケは、DSRにおいてライブニッツが並行論(*parallelism*)を保持しているという。レルケはDSRの小論の一つ『形相からの諸事物の起源について(*De Origine Rerum ex Formis*)』を踏まえて、諸属性相互に並行関係が見られる、というのである(pp. 477-9)。ここでレルケは並行論を、魂と身体との間の、因果関係のない対応関係(*correspondence non causale*)と定義する(p. 444)。しかしレルケは、並行論という語を広い意味で使いすぎている

のではないだろうか。この用語法に従うのであれば、DSRにおけるライプニッツだけではなく『モナドロジー』(1714)のライプニッツもまたこの「並行論」に与している、という結論になるのではないだろうか。というのも、『モナドロジー』においても、身体は(従属的なモナドの集まりとして)魂という支配的モナドと相互作用を欠いたまま対応し合うと考えられるからである。そうすると、並行論という語を、DSRにおけるライプニッツを特徴づけるものとして使うことはできないのではないだろうか。

#### 略号

A = *Sämtliche Schriften und Briefe*. Herausgegeben von der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Darmstadt, 1923 ff., Leipzig, 1938 ff., Berlin, 1950 ff. Cited by series, volume, and page.  
G = *Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*. Ed. C. I. Gerhardt. Berlin: Weidmann, 1875-1890. Reprint, Hildesheim: Georg Olms, 1978. Cited by volume and page.

#### 文献

- Adams, A. (1994). *Leibniz: Determinist, Theist, Idealist*. Oxford University Press.  
Brown, G. (1995). "Leibniz's Moral Philosophy" In N. Jolley ed. *Cambridge Companion to Leibniz*. Cambridge University Press, pp. 411-41.  
Carraud, V. (2002). *Causa sive ratio. La raison de la cause, de Suarez à Leibniz*. Presses Universitaires de France.  
Friedmann, G. (1962). *Leibniz et Spinoza*. 2nd ed. Gallimard.  
枝村祥平 (2014). 「『至高存在について』の形而上学とその発展」、日本ライプニッツ協会『ライプニッツ研究』第3号。  
Kulstad, M. (1994). "Did Leibniz Incline towards Monistic Pantheism in 1676?" *Leibniz und Europa: VI. Internationaler Leibniz-Kongress*, Teil I, Hanover, pp. 424-8.  
———. (1999). "Leibniz's De Summa Rerum. The Origin of the Variety of Things, in Connection with the Spinoza-Tschirnhaus Correspondence" In F. Nef. and D. Berlioz eds, *L'actualité de Leibniz: les deux labyrinths. Studia Leibnitiana Supplementa* 34, pp. 69-86.  
Laerke, M. (2009). "The problem of Alloglossia. Leibniz on Spinoza's Innovative Use of Philosophical Language." *British Journal for the History of Philosophy* 17:5 939-53.  
———. (2011). "Spinoza's Cosmological Argument in the Ethics." *Journal of the History of Philosophy* 49:4 439-62.  
Parkinson, G.H.R. (1978). "Leibniz's Paris Writings in Relation to Spinoza" In *Leibniz à Paris (1672-76)*. *Studia Leibnitiana Supplementa* 18, Felix Steiner Verlag. pp. 73-90.  
Stein, L. (1890). *Leibniz und Spinoza*. Georg Reimer.

[金沢星稜大学経済学部准教授・哲学]